

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十九以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十九の答えは国語五の解答らんに書きなさい。字数の指定がある問題は、句読点や「」なども一字と数えます。

流行と風俗を追って、ある企業が『女性の戦後変身史』という本をつくって、新聞でひろくとりあげられ、たまたまその本を手にする機会ももちました。その本自体はよくあるカタログのたぐいでさしたる印象ものこらなかつたのですが、ただその本のおしまいに、企画に応じた全国の千人の女性を対象に、「私の尊敬する人」というアンケートの集計がのっていて、それはなかなか興味ぶかいものでした。「私の尊敬する人」としてあげられたうち、もつともおおかつたのは黒柳徹子さんと、八十人。つづいては、そのほぼ半数が、ヘレン・ケラーをあげ、さらにいろいろな人が以下につづきます。千人のうちほぼ百人は回答なしで、回答者のおよそ一割が黒柳さんをあげているのですから、何といつても黒柳さんが一番にみえます。それは、その本が企画されたのが黒柳さんの『窓ぎわのトットちゃん』という本がクウゼンのベストセラーとなつた年だつたというその反響のせいだつたでしょうし、つづいてのヘレン・ケラーというのも、おそらくその企画に前後して映画や舞台で『奇蹟の人』が演じられたことの反響かもしれせん。しかし、よくみると、回答で人数として一番おおいのは、じつをいうと、他の誰とも、じぶんの尊敬する人が重複していない百九十九人の人びとなんです。1 そのことが、わたしにはとてもおもしろかつた。

仮にこの統計をいまの女性たちの関心のホウイをあらわすものとかんがえて、いまもつともひろくシンジされているのは『衆目の一致するところ』黒柳さんが一番というふうにとるか、それとも一見バラバラにみえるけれども、それぞれがそれぞれにとっての価値を重んじるしかたで、たがいの多様性を一番重んじるようになってるというふうにとるかでは、意味するところは全然ちがつてくるでしょう。わたしは、後者の見方なんです。一人ひとりのもつ多様性がこんなふうに独立してでるところに、いかにも目立たないけれど、むしろいま、ここをささえている実質があるとおもふのです。

統計をとって、一致してる数のおおいものを多数というふうにとるの、いかにも目立つし、みやすいけれど、数というのは勘定のしかたで、とても「注」トリッキーになる。たとえば、多数が肝心ということでは選挙が「注」最たるものでしょうが、<sup>3</sup> 多数派がピックアップされてゆく過程で、何を百としての多数派なのかという、もとになる百、もとになる全体というのが、だんだんちいさくなってゆくんですね。しかし、いまは選挙で一ばんおおいものはいえは、結果として多数派をしめたものではなくて、じつをいえば棄権です。その一番おおい棄権が選挙においてあつても「無」のようにしかとりあつかわれぬ。だけれども、見かたを変えれば、それほどの棄権がでるといふのも、いまの選挙のありようがかならずしも人びとの政治への関心の、必要な十分な容れものになつてないことを「注」如実にしめして、棄権というのは政治への無関心というより、むしろ人びとと政治との現在の「注」乖離をしめす目安でしょう。多数派が幅をきかすのは、そうした乖離がともおおきくなつ

て、全体というのがとてもちいさくされているとき。

いまはすべてをベストテンみたいになしかたで測つてくつて、数のおおいものに時代の焦点をみようとしがちで、そうしたなかで、社会の全体像がずんずんちいさくされている、あるいはちいさくみせられるということがあるとおもふ。しかし、社会の容量というのは、<sup>1</sup> によってでなく、<sup>2</sup> によって決まる。いまはこういう時代なのだ、多数の言葉で語るベストテンやクローズアップされた情報の側からでなく、一人ひとりの側から、わが身の側から、ものをみてゆくようにしないと、視聴率調査で、TVのこの番組をこんなに大多数がみているぞと知らされると、ワツと話題がその一点にゆくというようにして、われにもあらず、じつはトリッキーなしかたでちいさくされてゆく全体に、<sup>3</sup> をとられちゃうことになる。多数派が幅をきかせる社会というのは、きまつて浮き<sup>3</sup> だつた社会です。

① 平均をとるといふしかたで、統計がトリッキーな全体をつくりだしてしまうという場合もすくなくないのです。② 国民栄養調査というのがあつて、その調査の決めてとされるのはPFC比率。③ 摂取熱量にしろタンパク質(P)、脂肪(F)、炭水化物(C)、それぞれの割合をあらわすものですが、そのPFC比率を食料供給から算出すると、日本人の食事の平均はきわめて理想的な比率をしめす結果になるといわれます。主食、主菜、副菜の組みあわせからなる日本人の食事様式は、④ 理想的だという議論が、昨今しきりにおこなわれるようになった。⑤ 実際はどうかというところ、ちがうんです。食生態学の足立己幸さんなどの調査によると、農村部では炭水化物のとりすぎ、都市部ではタンパク質、脂肪のとりすぎ。しかも、料理の品数がへつて、具入りの主食がふえて、農村部であれ都市部であれ、人びとの暮らしのなかから、主食、主菜、副菜という食事様式は、日常にどんどんなくなつてきている。そうであるにもかかわらず、日本人の食事は、全体を合計し平均してみると、奇妙なことにPFC比率は適正な結果になつてしまふ。いいかえると、この場合、平均値が適正であるということとは、一人ひとりの側からみると個々人の食事内容が、それだけ過不足がはげしいということを意味している。理想的どころか、<sup>注</sup>ありていは「注」惨澹たるものだというのです。

④ 一人ひとりにとつてもつともものぞましくない状態が、もつともものぞましい国民平均をつくつてしまふ。栄養調査の例は、平均的なものに安易に、社会の多数なるものの指数をみるのが、うっかりするとどんなに危うい、「注」さかしまの全体をこしらえてしまいかねないものかを、よくあらわしています。

平均値によつて語られる全体は、一つひとつのちがいを問うことをせず、問題があつても、それを例外としてしりぞける。ですから、教育の偏差値偏重にせられるように、平均値ばかりが優先されることになる、一人ひとりがいま、ここにもつ生きかたという具体的な視野が、ず

んずん失われてってしまうようになる。平均値にたよつてものかんがえ、一つひとつの事実の語るところのもの、一人ひとりのちがった生きようがにっているものを落つこととしてしまえば、<sup>5</sup>平均的には理想的だけれど、ありていは惨澹たるものというようなありようを、みすみす

【注9】甘受しなければならなくなるでしょう。「一九八四年」の作家オーウェルのいった痛烈な言葉をおもいだすんですが、オーウェルは

4

「といった。

それぞれがたがいにちがうということが、わたしたちにとつてのたのしいありようなのだという感じかたを、じぶんになくさないようにしたい。けれど、どうなのでしょう。いま、暮らしのよしあしというとき、その「よくなる」ということはじぶんのしたいことを、できるだけ他に代わつて肩代わりしてもらおうということですね。「お任せください」という代理商売、代理業に、生活設計も何もかも、それこそ政治から料理の味つけまで、代わつてやつてもらおう。笑うことでもじぶんから笑うのではなく、笑わせてもらおう。TVをみれば、じぶんに代わつてTVが「経験」を経験してくれる。「情報」というその「情報」は、おおくは体験の代理なんです。

確かに便利で「よくなった」けれど、一人ひとりの場においてよくよくかんがえると、何もかも代わつてやつてもらえるかわりに、何にも手も足もでないというふうになつてきちゃつてる。街角に、こわれたTVなんかがぼつと捨てられてあつても、それはもつたいたないことのようにだけれど、そうでなくて、そうしかできないからみたくになつています。TVというのはなにしろ、買ってアンテナを立てるところから、捨てるまで、みな代理業にやつてもらわないと、どうにもならない**代物**なんです。こわれたからなおそうとなかを開けてみたら、まるで手がだせない。こわれた部品はたいしたことなくても、修理のための出張費は部品費の十倍ぐらいかかる。おおきな**コシヨウ**だったら、買ったほうがずつと安い。では不用になつたTVを引きとりにきてもらおうとすると、その手数料がばかにならない。で、こつそりとごみ置場に捨てるのが、もつとも**セツヤク**ということになつてしまう。TVは暮らしのなかにあつて、いわばまつたくの【注10】ブラックボックスなんです。まさに象徴的な例ですが、TVが茶の間にはいつてきたときが、やがて**圧倒的に** <sup>6</sup>手も足も出ない暮らしのハードウェア(＝機械や装置)が、次々と日常のなかにはいつてくることになつたたぶん最初だったとおもう。ラジオなら、まだ誰にだつてたいたたり、けとばしたりすれば、なんとか音がでたけれども。

手も足もだせる <sup>7</sup>自前の、独自の遠近法というものを、日常ふだんに、正直にもちつづけるようにしたい。知識があれば手も足もでるといふんじゃないのです。知識だつてブラックボックスとして、封印された知識のようにしかはたらかないということが、「I」あるんです。たとえば、世界地図帖をひらいて、世界の国々の位置というのを、地図のうえでよくよく承知しているようなつもりになるということがあります。しかし、国々の位置というのは、地図帖のうゑに**抽象的な図形**のようにあるようにみえて、その実、一人ひとりの側というところからかんが

えると、国々の位置、他の国の近さ遠さだつて、かならずしも距離の遠近じゃない、というのがほんとうです。じぶんの知りあいの誰かが、そこに滞在していた。あるいは、旅してきた。そして特別な感情をもつてかえつてきたとすると、にわかにはじぶんにとつてそれまで知らなかった国がちがうてくるということがあるし、あるいはもしその国の誰かと知りあひだつたとしたら、その一人の知りあひをおして、その国がじぶんにとつてはなにより親しい国だということがある。じぶんでその国へ旅したことがあり、そこで暮らしたことがあればなおさらだし、そうでなくて本を読むなどして【注11】独得の感情がじぶんのなかにつくられることもある。

そういう一人ひとりの側からの普通の感情をおして、じぶんの世界地図というものを日常の感覚のなかに親しくつくつてゆくようにすると、じぶんにとつての世界の光景がじぶんの目にみえてくるようになる。

<sup>8</sup>知識によつてじぶんの毎日の経験、日常の感覚をさつさと切り捨ててしまふのが知識につく(＝知識を重視する)ことであるかのようなトリッキーな知のありようを、じぶんに「II」と受けいれてしまつて何とおもわないうと、ちいさくされたトリッキーな全体のなかに手も足もでないままに、じぶんそのものだつて、いつかじぶんにとつてブラックボックスになつてしまいかねないんです。いつも経験と知識とを二つのわたしのいま、ここという場でたがいにぶつつけあわせてゆくことで、じぶんがもつ遠近法のひずみ、ゆがみをできるだけへらしてゆくようにしないと、どうにもまずいんじゃないか。一コの経験に対して不正直であるような知識というのは、めつたに信用ならないんです。

地縁や血縁というように、縁を**元手**にして社会をつくつてきた日本では、そこに住む、そこに暮らすということは、たとえばかつて【注12】大川端に住んだひとにとつて、川の眺めが縁という感覚のおおきな情緒的な要素をつくつていたみたいに、街並みや匂いとかいったものまでふくんでいた。けれど、そこに高速道路ができて、眺めがまったくちがつてしまうと、そういうじぶんのよつて生きた縁なんか語りようもなくなくなつてきます。地名も、建物もすつかり変わつて、風景もどんどん変わつてきて、一人ひとりにとつての生きた縁、とりかえのきかない経験というのが、具体的に確かなしから、ひととひとのあいだに置かれるということが、どんどんむずかしくなつてくる。

【注14】手足れの文句によくあるように、すぐに「ひととは誰でも」と歌つちやう。しかし「ひととは誰でも」といふように「みんな」という多数派の言葉に身をよせて物言う術というのは、ほんとうはずいぶんあやしげなんです。子どもたちが何かほしいとき、「みんなもつてるよ」といふだけで、その「みんな」といふのは、まずたいていはクラスで二、三人くらいだといひます。「みんな」「人は誰でも」といった言葉でいうと、いかにもそのように、またそのようになければならぬみたいにおもえるというふうな物言う術にたいして、へんだという【注15】留保をのこしておかないと、「私」と、「人は誰でも」「みんな」とが、だんだん見分けもつかなくなつちやいます。そうでなくても、【注16】言葉のさきわう国柄



だから、**9** 言葉にたいしてよくよく「私」をむきあわせてゆくことができないうと、**10** 言葉がすぐ旗になっちゃうのです。

何でも代わってやってもらって、「私」まで「みんな」に肩代わりしてもらってというしかたで、仕事、暮らしのなかに希薄きはくになったのは、いつてみれば**17** スキル、熟練の感覚だろうとおもうのです。カンとかコツとかツボとか、そういうった独得の言いまわしでしかあらわしようもなかった、代えのきかない「これだ」というかんじ。**18** アブソリュート・リアリティというか、コツンというアタリが、日常の経験のなかで落っこちっちゃってる。それらをじぶんの五感をちゃんととはたらかせて、どれだけが身にもてるかどうかなんだとおもう。じぶんとはちがう、だけれども、そこにそういう人がいると知るだけで、おのずと気が開けてゆくということがあります。そういうありようがじぶんのものついま、ここというのを、ひととひとのあいだに確かにしてゆくんだとおもうんです。

「公私混同」を戒めるといふでしょう。その言葉を、「公」の支配を「私」におよぼさないようにすること、「私」を「公」に拡張しないことというふうに、わたしは解しています。「公」にたいして「私」をよく**19** 拮抗きっこうさせてゆくようでない、全体がたちまち「公」の名の下にちいさくなってトリッキーになっていってしまうんです。**5** という言葉をおもいだしたい。わたしはそういういい言葉をもってるはずなんです。じぶんにとつてのいま、ここというのは、「いまはこういう時代なんだ」というような、みくだす物言いによっては、けっしてみてこないだろう。わたしはそうかんがえています。そうではなくて、じぶんにとつて他に代わってもらえないものは何かという、一人ひとりの側にあるその何かのなかに、一人のわたしにとつてのいま、ここというのはあるんだ、と。

(長田弘『一人称で語る権利』)

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 **1** そのこと とありますが、「そのこと」とはどのようなことを指していますか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 「私の尊敬する人」の上位に入ったのが女性二人で、男性は一人もあがっていなかったということ。
- イ アンケート結果で一番おおいのは、実は他のだれとも回答が重複していない人たちだったということ。
- ウ ほぼ百人が回答なしで、黒柳徹子さんとヘレン・ケラー以外の尊敬する人が出なかったということ。
- エ 流行と風俗を追うアンケートでは、映画や舞台で反響のあった人が選ばれやすいということ。

問三 **2** 後者の見方 とありますが、これはどのような見方ですか。「見方」に続くように本文中から探して、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問四 **3** 多数派がピックアップされてゆく過程で、何を百としての多数派なのかという、もどになる百、もどになる全体というのが、だんだんちいさくなってゆく とありますが、選挙においてこのようになるのはなぜですか。その理由が書かれている部分を、「くから」につながるような一文で探し、その最初の五字をぬき出しなさい。

【注】

- 1 衆目 || 多くの人の見るところ
- 2 トリックイ || まどわししやすいもの
- 3 最たるもの || 第一のもの
- 4 如実に || その通りに ありのままに
- 5 乖離 || はなればなれになること
- 6 ありていは || ありのままに言えば
- 7 惨澹たる || みじめでひどい
- 8 さかしまの || 逆の
- 9 甘受 || 文句を言わずに受け入れること
- 10 ブラックボックス || 使い方はわかるが仕組みはわからないもの
- 11 独得 || その人だけが得るさま
- 12 大川端 || 隅田川の岸辺
- 13 疎隔 || へだたり
- 14 手足れ || すぐれていること
- 15 留保 || すぐに決めないこと
- 16 言葉のさきわう国柄 || 日本は言葉の不思議な力によって幸福がもたらされている国だということ
- 17 スキル || 技能・技術
- 18 アブソリュート・リアリティ || 絶対の実感
- 19 拮抗 || たがいに同じくらい力で張り合うこと



問五 1 2 にあてはまる言葉をそれぞれ次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

- ア 多様性      イ 客観性      ウ 具体性      エ 反対派      オ 保守派      カ 多数派

問六 二か所ある 3 には同じ言葉が入ります。その言葉を漢字一字で書きなさい。

問七 《①》《②》《③》《④》《⑤》にあてはまる言葉をそれぞれ次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

- ア ところが      イ つまり      ウ だから      エ あるいは      オ たとえば

問八 4 一人ひとりにとつてもつともものぞましくない状態が、もつともものぞましい国民平均をつくつてしまふ とありますが、「一人ひとりにとつてもつともものぞましくない状態」とはどのような状態を指していますか。あてはまるものを次のア～オの中から三つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人の食事様式のあり方が理想的であると言われている状態。  
 イ 日本人の一人一人の食事内容において、栄養成分の過不足がはげしい状態。  
 ウ 料理の品数がへって、具入りの主食がふえている状態。  
 エ 平均してみると、過不足があるのにPFC比率は適正な結果になってしまふ状態。  
 オ 農村部では炭水化物を、都市部ではタンパク質や脂肪をとりすぎる状態。

問九 5 平均的には理想的だけれど、ありていは惨澹たるもの とありますが、なぜそうなるのですか。その理由が書かれている部分を、「くから」につながるような一文で探し、その最初の五字をぬき出しなさい。

問十 4 に入る表現としてもつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は万物の尺度である      イ 現実を直視する心で世界と勝負せよ  
 ウ 情熱のみが理性を鋭くする      エ 正気というのは統計的なものじゃない

問十一 6 手も足も出ない暮らしのハードウェア(機械や装置)が、次々と日常のなかにはいつてくることになった とありますが、「手も足も出ない」とはここではどういう意味なのかを答えなさい。

問十二 7 自前の、独自の遠近法 とありますが、これはどういう意味ですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の日々の経験を基にして、親しみ深さを感じる世界のとらえ方。  
 イ 自分の考えに加え、地図で抽象的な図形として理解する世界のとらえ方。  
 ウ 自分の経験だけではなく、他者の意見もとり入れた世界のとらえ方。  
 エ 自分の視点だけではなく、外側からも客観的に見る世界のとらえ方。

問十三 「Ⅰ」「Ⅱ」にあてはまる言葉を次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

- ア みすみす      イ うすうす      ウ やすやす      エ るる      オ まま      カ よよ

問十四 8 知識によってじぶんの毎日の経験、日常の感覚をさっさと切り捨ててしまふのが知識につく(知識を重視することであるか)のようなトリッキーな知のありよう とありますが、この内容を具体的に述べている一文を  の段落から探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。



問十五 9 言葉にたいしてよくよく「私」をむきあわせてゆく について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「言葉」とは、具体的にどんな言葉を指しますか。本文中から探し、十五字以上二十字以内でぬき出しなさい。
- (2) (1)で答えた言葉に対して「私」をむきあわせてゆくとはどういうことですか。考えて自分の言葉で答えなさい。

問十六 10 言葉がすぐ旗になつちやうのです とありますが、ここでの「旗」の意味としてあてはまらないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目標
- イ 象徴
- ウ 理想
- エ 実績
- オ 目印

問十七 5 にもっともよくあてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一期一会
- イ 十人十色
- ウ 千変万化
- エ 創意工夫

問十八 この文章の特徴としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア キーワードをくり返し使つて、主題を分かりやすく示そうとしている。
- イ 読者に語りかけるような文体により、親しみやすさを感じさせている。
- ウ 起承転結を用いた文章の組み立てで、すじみちを分かりやすく述べている。
- エ ささまざまな具体例を用い、角度を変えながら一貫した主張を述べている。

問十九 この文章で筆者の言いたいことを次のようにまとめました。文章全体の内容から考えて、解答らんに合うように書きなさい。答えは、左の解答らんに直接書きなさい。

私たちは

というあり方ではなくて、

というあり方を心がけるべきである。



Blank space for the student's name.

問一

クウゼン
ホウイ
シジ
代物
コショウ

セツヤク
元手

問二

問三
最初
最後
見方

問四

問五
1
2

問六

問七
①
②
③
④
⑤

問八

問九
最後

問十

問十一
最初

問十二

問十三
I
II

問十四

最初
最後

問十五 (1)

15
最後

(2)

最初
最後

問十六

問十七
問十八

問十九 答えは

国語一五

の解答らんに書きなさい。